

# 楽譜監修者による演奏解釈の比較とその効果についての一考察 —フランシスコ・ミニョーネ『街角のワルツ』を題材に—

## Study of the Comparison with the Effect of Performance Interpretation by the Music Editorial Supervisor —Francisco Minyone the “Street Corner of the Waltz” to the Subject—

(2016年3月31日受理)

小野 文子 廣畑まゆ美  
Ayako Ono Hirohata Mayumi

**Key words:** フランシスコ・ミニョーネ, 『街角のワルツ』, 宮崎幸夫, マリア・ジョセフィーナ・ミニョーネ, 校訂, 監修, 演奏表現

### 要 旨

フランシスコ・ミニョーネ作曲『街角のワルツ第5番』は民族性を反映した優雅でリズムカルな音楽である。ブラジルは1500年にポルトガル人に発見され、移民を主に幅広い文化交流がなされる場所となり、ヨーロッパの文化の影響を受けながら発展した。音楽にもその影響が強く表れており、ブラジルの持つ民族性とヨーロッパからの音楽の形式美が融合し、独特な印象を放っている。しかしラテンアメリカにおける音楽は近代に近い時点で発展していることから、調査文献等は少ない。また経済的にも現在になってようやくBRICSの中の1国として発展していることもあり、調査を蓄積していく印刷技術や保存技術が長けているとも言い難い。現にこの『街角のワルツ』の原典版も原典出版社での保管状況が悪く楽譜に不備が見受けられるとのことである。

この曲を演奏する過程で2冊の楽譜に出会ったが、見比べると、存在するはずのところにペダル記号がなかったり、存在しないはずのところに速度表示があったり、楽譜によって書かれていることが多少違うことに気付いた。この違いは何を元に生まれ、どちらが正しいのか、演奏としてあるべき姿はどちらの方がよいのか。その楽曲を制作した時の作曲家の状況等も含めて調査し、楽譜の監修者による演奏解釈の比較とその効果について考察する。<sup>(1)</sup>

### 1. 先行研究

楽譜を比較研究する研究論文は多々あるが、岐阜大学教育学部の仲田久美子による『エディション比較研究 ショパン《ピアノソナタ第2番 Op. 35》—系譜をたどる— (3) 補遺』(岐阜大学教育学部, 2015)<sup>(2)</sup>では9種類の楽譜の記載の違いがつぶさに調べられている。類似点や相違点を調べた上で導き出される結論が明確ではないが、版によって違いがあることが分かった。著者;小野の『Franz Lisztの「超絶機構練習曲」—演奏者からみた初版及び原稿版の比較研究—』(中国学園大学紀要, 1995年)<sup>(3)</sup>においては、楽譜をつぶさに見ていき音域

や強弱の幅を調べ、表現の成熟していく過程を研究した。沼田宏行による『ドビュッシー《練習曲集》の原典研究と演奏解釈に基づく校訂:再現芸術における楽譜の信頼性と可能性+(演奏)ドビュッシー作曲「Images」他』(東京芸術大学, 1997年)<sup>(4)</sup>は原典版と校訂版の違いがもたらす演奏の違いに言及されている。今回の研究は沼田の研究に類似している部分があるものの、まだ研究が活発に進んでいるとはいえないラテン音楽の分野であり、先日まで生存していた作曲家である。また公私のパートナーがピアニストで実際に作曲家本人の教えを受けていること等から校訂版における信頼度も高い。違う版の相違点を調べるとともに、監修者・校訂者の意向をヒアリ

ング・文献調査しながら、楽譜監修者による違いとその演奏効果について何を信頼していけばよいのか、調査を進めていく。

## 2. フランシスコ・ミニョーネの人物像と『街角のワルツ』について

ブラジルを代表する作曲家の一人、パウロ・フランシスコ・ミニョーネPaulo Francisco Mignone (1897年9月3日サンパウロ生、1986年2月20日リオ・デ・ジャネイロ没)は作曲、指揮者、ピアニスト、教師、劇場、文化省、放送局の音楽監督等と多方面にわたって活躍した。イタリアから移住した両親のもとで、早くから音楽教育の施しをうけ、13歳でオーケストラの一員として活躍、1914年にサンパウロ音楽院に入学し本格的な勉強を始め、ブラジルで最も著名な音楽学者マリオ・デ・アンデラーデについて学んだ。これが彼の音楽美学や音響学的なものに大きな影響を及ぼした。1923年にはヨーロッパへ遊学して研鑽を積み、1928年に帰国。この頃ブラジルでは民族音楽誕生の気運もあり、ミニョーネも民族主義的作品を積極的に作った時期である。彼のピアノの作品は250曲以上もあり、ブラジル特有の豊饒な描写や民族性、イタリア系ヨーロッパ風エレガンス等が反映されたものとして高く評価されている。とくにワルツの作曲に優れており、“ワルツ王”と呼ばれた。その中の代表作が『街角のワルツ』である。1938年から1943年まで書き続けられたワルツはシンプルながら、どの曲も類似しない音色である。ミニョーネは1968年に70歳の記念として、“ブラジル・クラシック音楽史の証言”という企画をリオ・デ・ジャネイロ州立文化局音と映像の博物館より受けており、そのインタビューの中で『街角のワルツ』の成り立ちについて以下のように述べている部分がある。

「若いころのサンパウロのセレナータを思い出し、当時ブラジルの音楽でアメリカの影響を最も受けていないヴァルサ——最も、その根源はショパンやイタリア、スペインであるのですが——をテーマにすることにしました。書き始めた時は一気に書き上げられるように思いましたが、シンプルであるけれど、空虚ではなくとの思いから、入念な準備にも時間がかかり、非常に難しいことでした。その後私はこの最初の作品をさらに補うための、

一連の《ヴァルサ・ショーロ》を書きました。しかし、ブラジルのでなければ、それを表現しなくては、という思いがあまりに深く脳裏に焼き付いていました」

このように、その時の気運を反映しながらも、単純に終わらせない思考錯誤が作曲の際に重ねられたことを伺わせる。1940年ごろは、新しいスタイルを模索しようとしており、その葛藤が見受けられるものも多々あるが、常にブラジルのクラシック音楽の興隆を意識し、その民族性を音楽に反映し続けながら作曲をしてきた人物なのである。

## 3. 楽譜の比較

しかしなぜそのようにこだわりをもった作曲家の作品で、楽譜による違いが生じるのか。一つ大前提として、F. ミニョーネの『街角のワルツ』の原典版は保管状態が悪く、執筆楽譜の状態が残っていないということが分かった。

国内で入手できた下記2種類の楽譜の比較を行った。

- ①全音楽譜出版社『ラテン・アメリカ・ピアノ曲選①  
ブラジル編1』(宮崎幸夫一校訂・監修)<sup>(5)</sup>
- ②音楽之友社『ミニョーネ 12の街角のワルツ』(マリア・ジョセフィーナ・ミニョーネ一校訂・監修)

全音楽譜出版社の楽譜を監修しているのはピアニストの宮崎幸夫氏である。1979年にはブラジルピアノコンクール第1位グランプリ受賞(パリ)。ヴィラ=ロボスの演奏・研究で名高く、そこから派生したブラジルやキューバ等ラテンアメリカの音楽研究で各作曲家のピアノ曲集の編纂多数、CD録音多数がある。

音楽之友社はF. ミニョーネの2番目の妻である、マリア・ジョセフィーナ・ミニョーネ氏による監修・校訂である。彼女はピアニストで実際ミニョーネから手ほどきを受けているのとF. ミニョーネによる自筆の資料等を所持していることが他の監修とは違う独特な特徴である。

2種類の楽譜を見比べると、強弱の付け方や発想記号の指示、一部音の表記に違いがあることが分かった。楽譜の監修者によって作曲家の意図に手が加えられるのは許容されることなのだろうか。それが許容されるとすれば、何を根拠にそのような経緯を加えるのか。『街角の

ワルツ第5番』を見比べながら、各監修が意図するところを調べた。

全音楽譜出版社『ラテン・アメリカ・ピアノ曲選① ブラジル編1』と音楽之友社『ミニョーネ 12の街角のワルツ』に記載されている「街角のワルツ第5番」の表記で奏法が違った点は下記の通りである。

※小節は1番括弧を演奏したうえでのカウント。

小節	全音楽譜出版社	音楽之友社
35小節目	—	H音とE音の和音にアルペジオ
43小節目	—	(a tempo)
45小節目	Dis(日本音名:嬰二)単音	Dis(日本音名:嬰二)がオクターヴの和音
45～47小節目	47小節目の終わりまでダンパーペダルの指示	46でダンパーペダルを離し、その後はペダル指示なし
47小節目	—	(poco rit.)
48小節目	—	(a tempo)
64小節目	—	(rall)
65小節目	—	Tempo Iよりダンパーペダルの指示
94小節目	—	(poco rit.)

第一印象として速度や発想に関する奏法の指示は、全音楽譜出版社にはなく、音楽之友社には加えられている、というケースが多く見受けられる。

音楽之友社版では校訂者であるマリア・ジョセフィーナ・ミニョーネ氏の解釈の部分には、( )がつけられており、必ずしも作曲家の意図ではないところが分かるように指示が入っている。しかし、音の違いや、( )が付いていない箇所は根拠が不明確である。

マリア・ジョセフィーナ・ミニョーネ氏の追記は速度表示のところで顕著に表れている。テンポを揺らすことはその曲の雰囲気形成するうえで強く影響する。加えられている部分は第2部の音の高低差の激しい盛り上がる部分の前後や、第2部から第3部への始まり、終盤である。強調したい部分を目立たせるために、マリア・ジョセフィーナ・ミニョーネ氏が速度を活用したことがよくわかる。

また45小節目、音楽之友社ではBass音がDis1の音域まで広がりを見せており、シンプルだったワルツに重厚感

が加わる。全音楽譜出版社のものはDisの単音で記譜されている。楽譜の中で音域が違うことにより、その曲が持つ表現力が大きく変化するが、この違いはかなり大きな違いであり、どちらの方が本来ミニョーネが目指した音楽であるかは重要なポイントである。

#### 4. インタビュー・文献調査

全音楽譜出版社からの楽譜を監修・校訂している宮崎幸夫氏に直接インタビューする機会を得ることができた。

Q1. 宮崎氏がこの楽譜を出版しようと思ったきっかけは？

—当時、ブラジル等で人気のある作曲家を紹介されて、研究し、それぞれの代表作を集めて曲集化した。フランスに留学し、そこでブラジル音楽のコンクールがあり、優勝したことが研究を深めるきっかけだった。特にヴィラ・ロボスを研究したが、そこでヨーロッパの音楽と南米の音楽にかかわりがあることを知った。コロンブスの時代はアメリカ大陸を探しに行ったほど、南米に可能性があると信じ込まれていた時代。モノや人の移動で、文化も移動し、音楽の形式等にも反映されている。バッハのシャコンヌはシャコーナという中南米の音楽形式が活用されたもの。逆にポロネーズはヨーロッパで生まれて中南米に伝わったもの。そうやって相互に文化が影響していることがとても興味深いので、ヨーロッパの音楽のルーツを知るにも南米の音楽を知ることは欠かせないと思った。

Q2. 街角のワルツで音楽之友社から出版されている楽譜を見た。宮崎氏の監修とは違うところが数か所見受けられたが、監修の過程で演奏者の思考が楽譜の要素として加わってもよいものかどうか？

—私は作曲家の楽譜に手を加えるようなことはしない。ドレミ楽譜出版社から出している『アストル・ピアソラ曲集』はもともとバンドネオンの曲なので、ピアノに書き換える必要があったが、ピアノの譜面で書かれたものは基本的に原典版から引用しておりそのままである。この『ラテン・アメリカ・ピアノ曲選』は当時人気のあつ

た作曲家の代表曲をまとめたもの。監修というのは、この曲集を作るにあたって曲選を行ったという意味で楽譜に手を加えたということではない。マンジョーネ版という原典版から引用している。

Q 3. しかしマンジョーネ版は保管不備で自筆は11番のみ、という記載が音楽之友社から出版されている楽譜に記載があった。

一明らかにおかしい音符の間違いは修正しているが、それ以外に手を加えてはいない。マリア・ジョセフィーナ・ミニョーネ氏はピアニストかつ実際ミニョーネからの指導を受けているので、それを自分なりに解釈しているのだと考えられる。すべて事実であっても、作曲者の楽譜に手を加えることはあってはならないことだと考える。

このインタビューを経て、宮崎氏は多少楽譜の状態を整えることはあっても基本的に原典版に忠実に記譜しているということ、作曲者の思考に手を加えることはあってはならないという意図を持って監修に臨んでいることが分かる。故に、全音楽譜出版社の楽譜では、原典版とされているものを元にミニョーネ氏が作った時の状態に確実に近いものが反映されているということである。

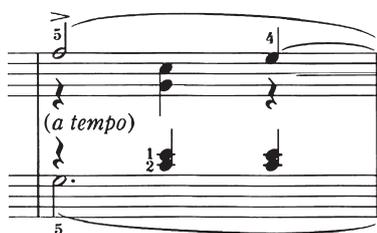
音楽之友社では校訂の経緯が記載されている。こちら宮崎氏と同じく基本的にマンジョーネ版と自筆譜をもとにしているが、マンジョーネ版は保管不備により、完全な自筆譜として残されているのは第11番のみである。これを除く11曲は原典出版社のマンジョーネを底本としている。しかし初版に手を加えず今日まで印刷されている楽譜であるため、印刷上のミスもそのままである。この状態を改善しようと、校訂・編集にあたり、生涯にわたりミニョーネ氏の作品を演奏してきたマリア・ジョセフィーナ・ミニョーネ氏によって、彼女がF. ミニョーネから受けていた指示や助言による貴重な校訂や、F. ミニョーネ自筆の資料が提供されたのである。印刷上のミスも訂正されている。しかしその中において、マリア・ジョセフィーナ・ミニョーネ氏の校訂は「MJ」、F. ミニョーネ本人の校訂は「FJ」等と分けて記載されているのに加え、彼が独自に加えた奏法記号は（ ）で括られている。(図1参照)やはり何処までがF. ミニョーネによるもので、どこまでがマリア・ジョセフィーナ・ミニョーネ氏によるものかは分けていることが見受けられる。彼

女自身がピアニストであり、F. ミニョーネの近くに居た人物であったことによる影響は大いにあると推測できるが、彼女が書き加えたものはF. ミニョーネの作品ではないのは事実である。音楽之友社もF. ミニョーネの原典版を忠実に記譜することに力を入れているが、それはあくまで保管不備であったことを踏まえたうえで、本来F. ミニョーネが表現したかったものを再現することが目的となっている。そうでなければ「MJ」、「FJ」と指示の出所を分けない。しかしマリア・ジョセフィーナ・ミニョーネ氏の校訂もF. ミニョーネの思考が加わっているものと仮定すれば、それは演奏研究には捨てがたい要素であるので、出所を明記して記載しているのだらうと推測できる。

そう考えると、音の表記が違った45小節は興味深い。(図2参照)これはもともと単音だったが、F. ミニョーネ自身により加筆されたものだと、音楽之友社の楽譜に記載がある。常に新しい音楽の道を模索している、というのは本人の証言にもあるが、時間が経過して以前記載した楽譜を書き換えるということは作曲家にとって珍しいことではない。宮崎氏の監修した楽譜の初版出版は1998年、一方音楽之友社の初版出版は2005年、第5刷が2015年に出たばかりである。ゆえに楽譜の状態としては音楽之友社の方が最新の研究内容が反映されている可能性が大いにある。1995年、著者：小野による『Franz Lisztの「超絶機構練習曲」—演奏者からみた初版及び原稿版の比較研究—』ではF. リストの創作活動の成熟とともに、音楽が多様に変化し、最終的に現在の姿に落ち着く様子が細かく記載されている。現行楽譜のルーツを探ることにより、作曲家が最終的に表現したかったことや、その作曲家自身の演奏技術の発展を感じることができると論じられている。音楽之友社のように、様々な資料を集めて、より作曲者が最終的に表現したかったことを調べていることも、作曲者が意図することを表現するためには必要である。

## 【図1】

音楽之友社版のマリア・ジョセフィーナ・ミニョーネ氏の指示の記載方法

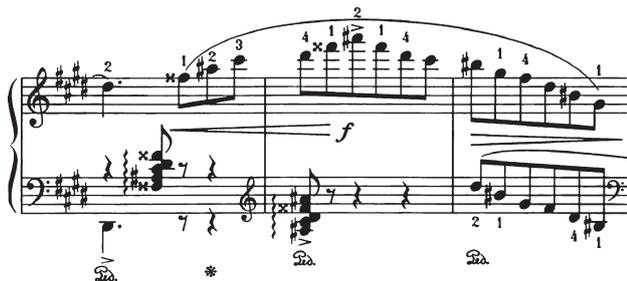


( ) により速度記号が書き加えられている。

## 【図2】

45小節目の比較

《全音楽譜出版社》※下記楽譜では1小節目



《音楽之友社》※下記楽譜では2小節目



45小節目のDis音が全音楽譜出版社では単音、音楽之友社ではオクターヴで表記されている。

## 5. ま と め

楽譜が2冊あることにより、何を選択すればよいのか、どちらがより本質に近いのか、または演奏がしやすいのか演奏者は選択に迷う。音楽教師はどのような見解をもつのか、レッスンに関する書籍『絶対！進化する ピアノレッスン100のコツ』の著書、黒河好子氏<sup>(6)</sup>の見解によると、「手の大きさなどにより、運指が変わるので、自分に合う楽譜を見つけることです。最低2冊の楽譜を使うことが理想です。」と語っている。

黒河氏は自書の中で、原典版は作曲者の意図を忠実に研究して書かれた楽譜、校訂版はピアニスト等の校訂者が独自の解釈を加えたもの、自筆譜は作曲者自身が遺したものととらえている。音が変わるということはまずないが、表現記号や運指が違うことがあるので、あくまで選択は演奏者に委ねられているという思考である。

今回楽譜監修者のインタビューや楽譜に記載された文献を参考にして分かったことは、全音楽譜出版社、音楽之友社の楽譜とも、作曲家の意図を忠実に反映することを根底に持っている。マンジョーネ版の保管不備から生まれている部分が問題を複雑にしているのはいうまでもないが、作曲者と校訂者の意図を明確に分ける等の指示を加えていることなどからわかるように、F. ミニョーネが何を残そうとしたのか、表現したかったことは何だったのかということがどちらの楽譜からも研究のスタンスとして見受けられる。( ) で記されたマリア・ジョセフィーナ・ミニョーネ氏が加えている速度の指示をそのまま演奏することは、F. ミニョーネの口承伝達を反映したことにもつながるのかもしれないが、彼女の演奏技法の模倣に留まってしまう可能性も考えられる。また音楽之友社の楽譜に記載されている彼女の略歴では「F. ミニョーネの作品の演奏者に、彼から受け継いだすべてを伝えることを生涯の目標としている」という記載があるため、その可能性はより顕著だ。しかし音の校訂が加えられていたこと等は、新たな資料がなければ発見できなかったことであるため、彼女の存在なくしては見つからなかっただろうと思われる。

監修者による演奏解釈では、その監修者のプロフィールはとても重要になるが、作曲家が置かれた時代背景等を照らし合わせながら、何を表現したかったのかということを最大限に反映することが演奏においては極めて重要である。演奏者自身で思考し、知識が肉付けされた演奏に深みが増すことは間違いない。今回2社の楽譜のみで比較することに留まったので、出版社が違うものや他の作曲家で同様のケースがないか等研究の幅を広げていくことを今後の課題とする。

## 6. 参考文献・WEB

- (1) マリア・ジョセフィーナ・ミニョーネ (校訂・監修)『ミニョーネ 12の街角のワルツ』音楽之友社, 2015年, 第5刷
- (2) 仲田久美子『エディション比較研究 ショパン《ピアノソナタ第2番 Op.35》—系譜をたどる—(3)補遺』岐阜大学教育学部, 2015年
- (3) 小野文子『Franz Lisztの「超絶機構練習曲」—演奏者からみた初版及び原稿版の比較研究—』中国学園大学紀要, 1995年
- (4) 沼田宏行『ドビュッシー《練習曲集》の原典研究と演奏解釈に基づく校訂:再現芸術における楽譜の信頼性と可能性+(演奏)ドビュッシー作曲「Images」他』東京芸術大学, 1997年
- (5) 宮崎幸夫 (校訂・監修)『ラテン・アメリカ・ピアノ曲選1 ブラジル編1』全音出版社, 1998年
- (6) 黒河好子『絶対!進化する ピアノレッスン100のコツ』ヤマハミュージックメディア, 2014